ANSWERS TO THE MYSTERY OF THE WORLD'S MOST BEAUTIFUL CORPSE



TWIN PEAKS

FIRE WALK WITH ME

TERESA BANKS AND THE LAST SEVEN DAYS OF LAURA PALMER



ツイン・ピークス

ローラ・パーマー最期の7日間

EXPLANATION

Key word 1: It was a dream. We live inside a dream.

ついに映画ツイン・ピークスが秘密のベールをぬいだ！

アメリカ北西部にある、のどかな街ツイン・ピークス。
この街で２月24日の朝、ビニールに花束のように包まれた、
ハイスクールクイーン‘ローラ・パーマー’の死体が川のほとりで発見される。



この事件は、一見平穏に見えた地方都市の内部にうごめく、人間の欲望、犯罪の影、入り乱れた人間関係をむき出しにしていく。

ハイ・スクールの人気者‘ローラ・パーマー’の、醜い殺害に至るまでの７日間の出来事を克明に描く、本作『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の７日間』は、彼女にかかりくる悲劇をショッキングなシーンと、暗示的な事件を積み重ねていく独特なブラック感覚で描いた作品である。カンヌ国際映画祭グランプリを受賞した『ワイルド・アット・ハート』に続きデビッド・リンチ監督が、その実力を100%発揮した待望の最新作である。

いったい誰が、本当にローラを殺したのか？何故、ローラは殺されなければならなかったのか？今回の映画『ツイン・ピークス』は今までけっして描かれる事がなかった、被害者ローラ自身の私生活と殺害の過程を中心に置く事で、リンチが観客に対して仕掛けた罠の答が導き出されていく。

そしてそれは、想像を絶する衝撃を与え、今まで事実とされていた事が覆される事になったのだ。

‘カイル・マクラクラン’に加え、‘デビッド・ボウイ’‘キーファー・サザーランド’など映画的魅力満載の出演陣

今回の映画化にあたり、クーパー捜査官のカイル・マクラクラン、ゴードン捜査主任のリンチ監督、ローラ・パーマー役のシェリル・リーなど、テレビシリーズの主だった俳優達が顔をそろえ、それぞれの当たり役を怪演している。

また現在、世界的注目を集めている、リンチ監督の映画最新作という事から、スーパースター デビッド・ボウイ、『フラット・ライナーズ』などの若手演技派 キーファー・サザーランド、『パリ・テキサス』のハリー・ディーン・スタントン、ロック・ミュージシャンのクリス・アイザックらが登場。印象的な役を強烈な個性で演じ、まさに、超話題作にふさわしい素晴らしい顔ぶれとなっている。

『ツイン・ピークス』レギュラー俳優大活躍

『ツイン・ピークス』のテレビシリーズで注目を集めた演技者たちは、今やショービジネスの世界で引っぱりだこ。ローラ・パーマーを演じて、一役世界的な注目を集めたシェリル・リーは、本作映画『ツイン・ピークス』の主演の後、アル・パチーノと共演してブロードウェイの舞台『サロメ』に出演する事が決定した。そして心優しきガソリンスタンドの主人エドとその異常な片目の妻ネイディーンで夫婦役を演じたエヴァレット・マッギルとウェンディ・ロビーは、ウェス・クレイブン監督のホラー映画『壁の中に誰かがいる』でも夫婦役で主役スターとして堂々と怪演している。

バイク少年ジェームズ役のジェームズ・マーシャルは、初主演映画『GLADIATOR』が全米トップ10に入るスマッシュヒットを記録した。そしてウェイトレス、シェリー役のメッチェン・アミックは、スティーブン・キング原作の『スリープ・ウォーカー』に出演とまさに90年代の映画界を担うのは、『ツイン・ピークス』出身の役者達であることは、間違いない。

世界中が注目する超話題作’92カンヌ国際映画祭でワールドプレミア上映

『ツイン・ピークス』はリンチ監督により製作され、アメリカABCテレビのシリーズとして、90年の4月より91年の6月まで放映された。ゴールデングローブ賞を受賞、エミー賞において14部門でノミネートを受けるという快挙を成し遂げた。視聴率においても、全米ニールセンの1位となり、まさに芸術的にも話題的にもすべて大成功を収めている。

またそのブームは熱狂的なものとなり、作品の被害者である架空の女性‘ローラ・パーマー’は、米エスクァイア誌が選ぶ今年の顔としてカバーを飾った。ニューズ・ウイーク誌は、登場人物の相関図を掲載し、ラジオでは放映の翌日の朝、『ツイン・ピークス』の最新捜査状況や街の情報を放送した。

その他にも、サントラCD(ワーナーミュージックより発売中)、リンチの娘ジェニファーが執筆した『ローラの日記（THE SECRET DIARY OF LAURA PALMER)』、劇中クーパー捜査官が秘書のダイアンへ語るメッセージを収めた『クーパーは語る（THE AUTOBIOGRAPHY OF AGENT DALE COOPER)』、タウンガイド『ツイン・ピークスの歩き方（ACCESS GUIDE TO THE TOWN)』(日本版は3冊共、扶桑社刊)、Tシャツ、マグカップなど多くの関連商品が発売され、全米でベストセラーとなっている。

日本においては、90年秋のパイロット版のビデオ発売後、JSBによる放映、テレビシリーズのビデオリリース（91年12月完結）が続き、マスコミに大々的に取り上げられ、熱狂的なファンを生み出した。

そして今回、映画化のニュースは、いち早く世界中を駆けめぐった。情報に敏感なファンの間では、ローラの死に至る7日間の出来事の全てが克明に描写され、本当にローラを殺したのは誰なのか？何故、ローラは殺されなければならなかったのか？が、解明される映画『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』が必見の作品として大きな話題になった。世界が注目する中、92年5月のカンヌ国際映画祭において待望のワールドプレミア上映が行なわれた。



STORY

Key word 2 : Going up and down. Intercourse between the two world.

本当に誰が、ローラを殺したのか
何故?ローラは殺されなければならなかったのか
〝世界一美しい死体の謎〟=そして〝犯行の全貌〟がここに初めて解明された

デビッド・リンチの最新作である、本作『ツイン・ピークス〜ローラー・パーマー最期の７日間〜』は、美しい少女ローラ・パーマーの残酷な死の謎のすべてを、彼女が死を迎えるまでの７日間の出来事を克明に描きながら、解き明かしていく。

〈ローラ・パーマーが殺される1年と7日前〉

1988年、ワシントン州ウィンド川、花束のようにビニールに包まれた少女、テレサ・バンクスの死体が流れていく。

FBIのゴードン・コール地方捜査主任は、デズモンド捜査官、スタンリー捜査官と、この不可解な事件を協議した。コールは、暗号の指示を与え、彼らをワシントンに送り込んだ。ローラ・パーマーへと続く、ミステリアスな凶行事件が幕を開けたのである。

デズモンドとスタンリーは、テレサの死体を検死し、左手に指輪の抜き取られた跡、爪の下に犯人からのダイイング・メッセージを発見する。それは〝T〟というタイプ文字であった。街へ出た２人は、テレサがドラッグとセックスに溺れていた事実と閉鎖的な町の雰囲気を知る。更にデズモンドは、１人でテレサの住んでいたトレーラーを訪ねた。彼は、そこに〝盛り土〟を見つける。手を延ばしたとたん、彼は消えてしまう──。

フィラデルフィアのオフィス。ゴードンとデイル・クーパー特別捜査官の前に行方不明になっていたFBIの捜査官フィリップ・ジェフリーズが、突然現れた。そして、テレサ殺人事件とデズモンド失踪事件の背後に、大きな悪の存在があることを暗示して去ってゆく。クーパーは強い不安を覚える。

クーパーは、遺留品である車のフロントガラスに〝ロックしようぜ〟という文字を見つけた。犯人はもう１度現れ、凶行を繰り広げる、と彼は直感する。

〈１年後、ツイン・ピークス、最期の７日間〉

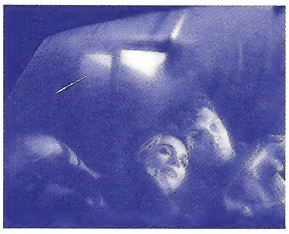
ハイスクールクイーンであるローラ・パーマーは、明るく魅力的な少女だ。だが、それは表面だけのこと、ボビー、ジェームズという２人の恋人にもイラ立ち、何かにおびえ、ドラッグとセックスに逃避する日々。ローラばかりではない。一見穏やかなこの地方都市では、裏側で乱れた人間関係が渦巻いていた。街全体が病んでいたのだ。

さし迫る悲劇の警告は、次々とローラの前に現れていた。生活の秘密を書いていた２冊めの日記が、何者かに破られたことに気づき動転するローラ。彼女は、友人である謎めいた青年、ハロルド・スミスに日記を託した。「犯人はボブ、ボブは本当にいる。12歳の時から私をおもちゃにしてる」ローラは告白するが、ハロルドにはどうすることもできない。

トレモンド夫人と孫息子がローラのところへやって来た。夫人はローラに１枚の絵を手渡す。「彼は破かれた日記を探して、今、扇風機の下を動いている」孫息子の言葉に、急いで家に戻るローラ。日記を求めて、ドレッサーを動かしていたボブと目が合う。叫び声を







上げてローラは飛び出した。はたして、彼女の後から外へ出たのは、父・リーランドであった。「まさか…そんな…うそよ」恐怖に震えるローラは、親友ドナのもとへ。

その夜、不思議な夢がローラを襲う。トレモンド夫人の写真、赤い部屋、別の場所からきた男、テレサの指輪。血だらけのアニーが何かささやく。

次の日。ボビーが、ローラと彼自身のためにコカインを探している。ローラの前にログ・レディが現れ、警告する。「火を消すのはとても難しいわ。無垢な弱い枝から焼え始めて、すべての善は危険にさらされる。」

ロードハウスで仲間と会い、クラブのような場所に行って遊ぶローラ。コカインと男たちの愛撫に酔うローラを後を追ってきたドナが見つめていた。ドナは仲間に入ろうとする。しかし、彼女にはあまりに刺激的な場所だ。ローラは必死でドナを止めようとする。

翌朝。ドナはゆうべの出来事が思い出せない。友情を確かめ合おうとするドナとローラの姿に、リーランドの不気味な視線が注がれている。彼は、テレサ事件を思い出していた。ローラ、ロネットは、テレサとも友人、そして、テレサを葬ったのは、リーランド。

ドナの家から、リーランドの車で帰る途中、ローラに向かって、突然見知らぬ片腕の男が叫んだ。「それは彼だ。君の父親だ！」ローラは、片腕の男がテレサと同じ指輪をしていたことに気がつく。

いよいよその時が近づいてきた。

2日前、夜。ボビーとローラは、コカイン入手のため待ち合わせた。森の約束の場所に来たのは、ディアメドウの副保安官、クリフ。動揺したボブのピストルは、クリフを撃ち殺してしまう。陰気なフクロウの鳴き声が響く。「あなたが殺したのはマイクだわ」ローラは狂ったように高笑いを上げた。

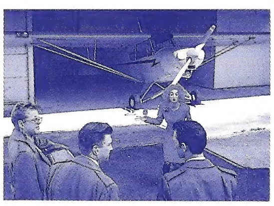
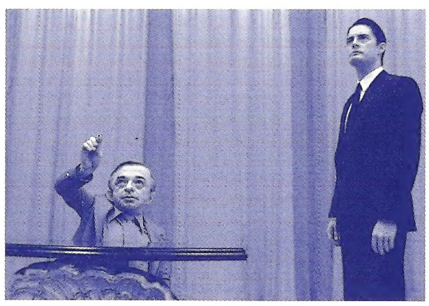
前日。静かな夜、回り始めた扇風機の音にローラはおびえる。ボブがやって来た。彼女にのしかかる。ボブの顔がリーランドになる。叫び、気を失うローラ。

最後の朝。すべてが明白になったローラ。リーランドも、すべてがわかっている。2人の間に流れる空気。

夜、ローラは、呼び出されるままジェームズと会った。ローラの冷たく奔放な態度は、彼を混乱させる。すでにローラの心は何かに奪われてしまっている。彼女は、森に引き寄せられるようにジェームズを振り切って走り出した。ジャック、レオ、ロネットとおち合い、キャビンで繰り広げられる目をおおうばかりの乱交。

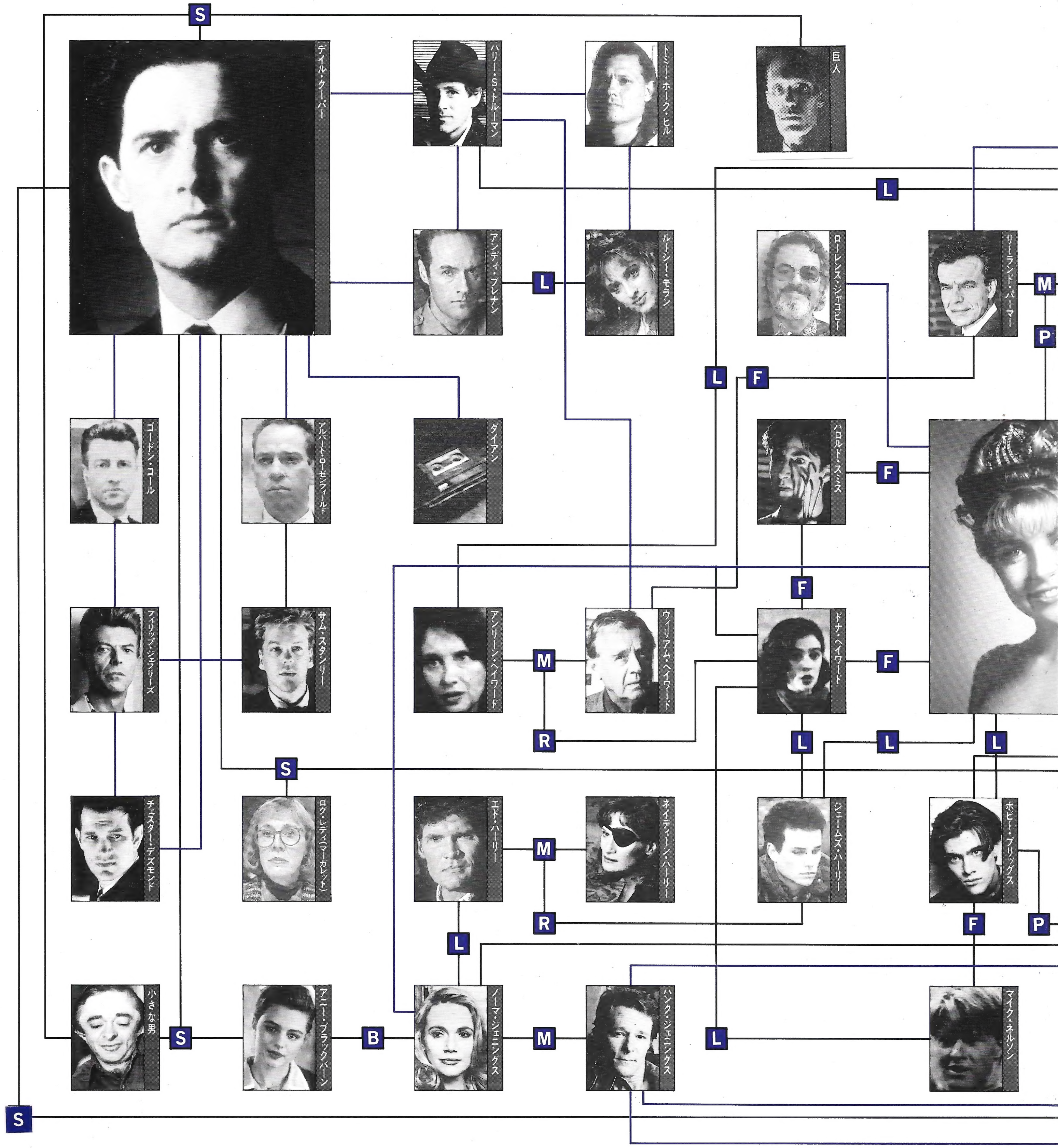
その時、まるで幽霊のように窓に立つ影があった。リーランドだ。

片腕の男が半狂乱で山道を走っている。運命の惨劇が、始まろうとしていた――。

TWIN PEAKS CORRELATION MAP

Key word 3: Is it future? Or is it past?

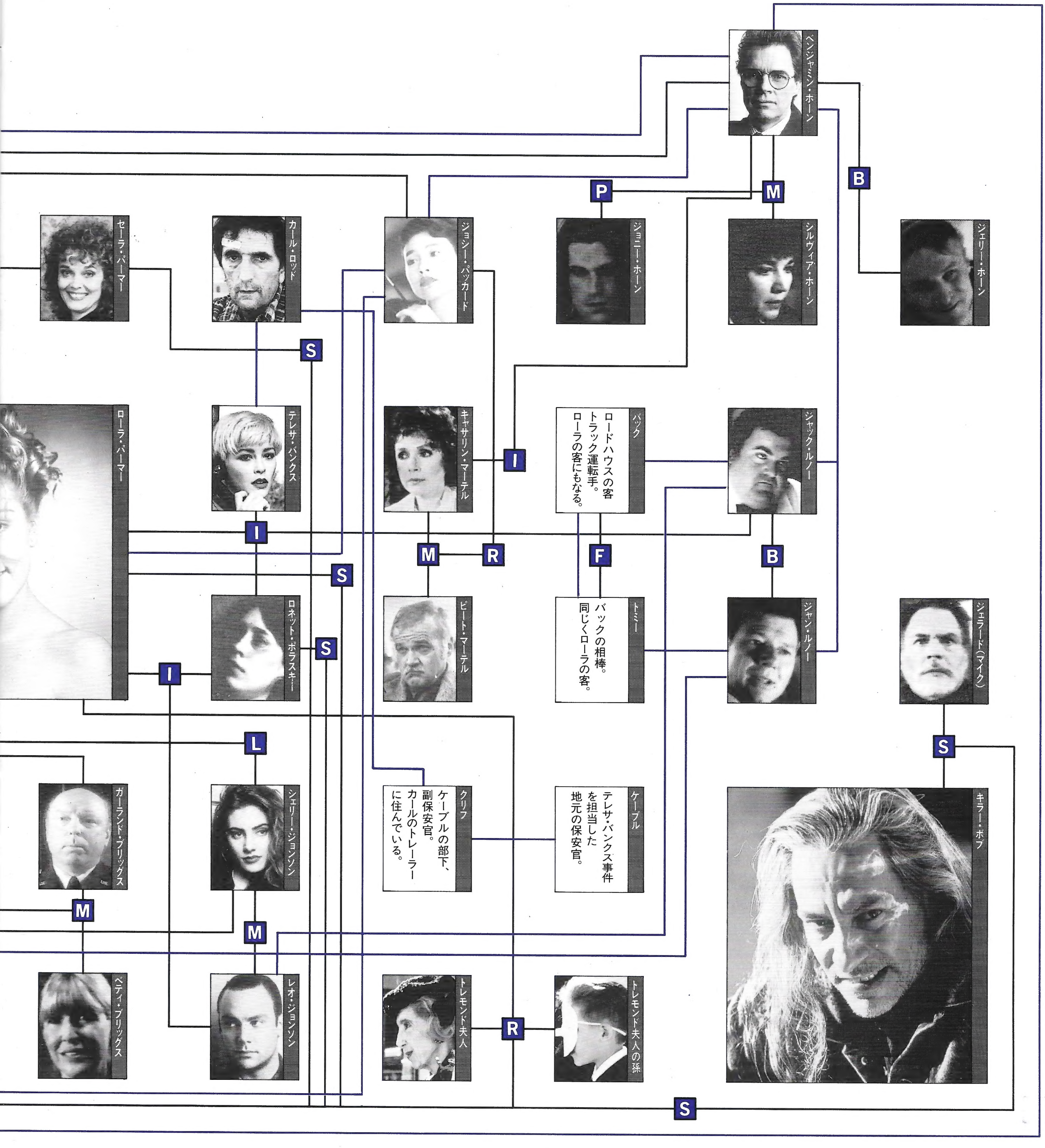


最近になって、人口が51201人でなく、5120.1人だと判明したというツイン・ピークス。
一見穏やかで小さな田舎町。
そこに繰り広げられる、複雑怪奇な人間模様。恋愛、友情、共謀、裏切り、敵対、偏愛……。
あなたは、誰がお気に入りですか？

（この人物相関図は、映画完成以前に、テレビシリーズならびに映画版脚本に基づいて、作成してあります。）

P 親子 Parents　**B** 兄弟姉妹 Brother　**R** 親類 Relative　**M** 夫婦 Married Couple　**L** 恋愛関係 Love

F 友人関係 Friend　**I** 深い関係 Intimated Relationship　**S** 想像を絶する関係 Supernatural　—— 仕事関係 Business



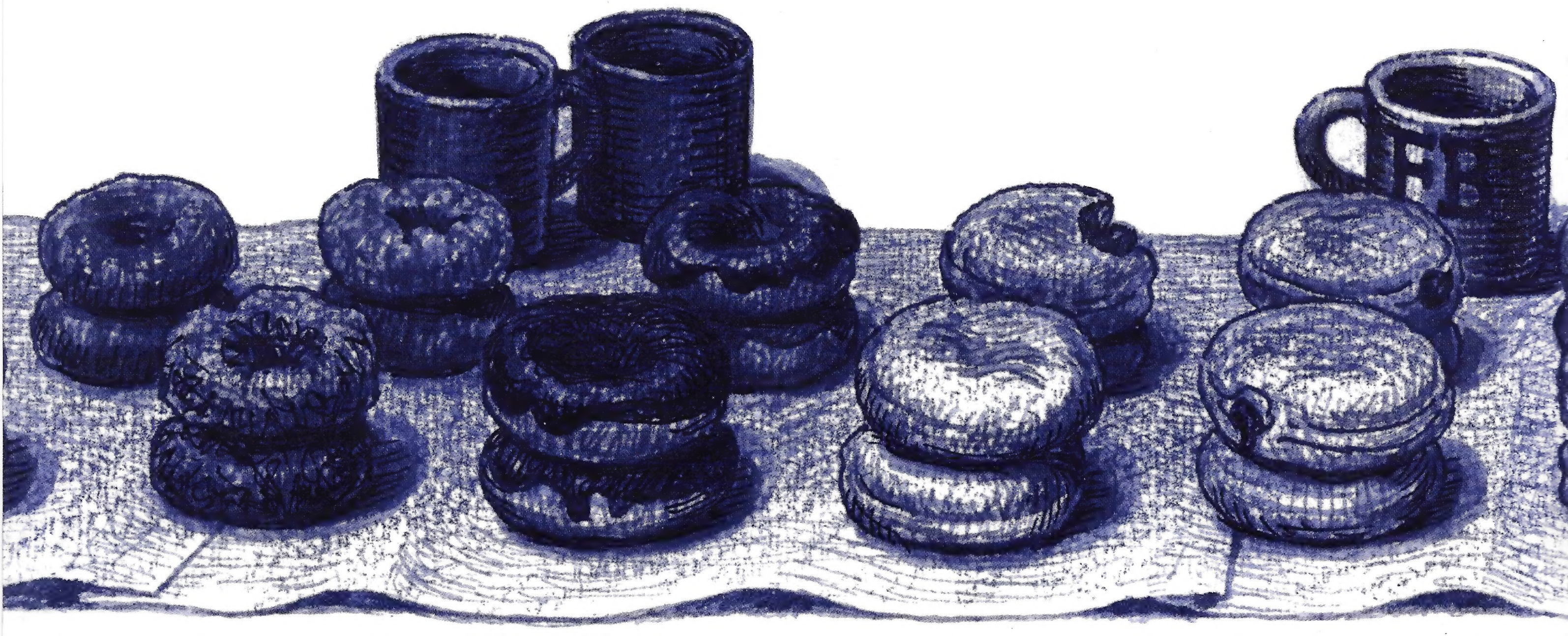
INNOCENT SMILE

Key word 4: The good Dale is in the lodge and he can't leave.

イノセントな微笑

滝本誠







人間の表情をしているが人間ではない。エイリアンがこの地上でぎこちなく身につけた美しい肉体と顔──。

このカイル・マクラクランの印象は、快作『ヒドゥン』で彼が演じたFBI捜査官の役柄そのままだが、同じ捜査官の設定をそのまま引きついだ『ツイン・ピークス』でもカイルはやはりどこか、地上離れしてみえる。

カイルにとって『ツイン・ピークス』はある意味で『ヒドゥン2』に他ならない。TVシリーズのあのラストは『ヒドゥン』の逆さひねりの悪夢だ。

不思議な地上離れの存在感ということでいえば、『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』に初登場するデビッド・ボウイも、70年代前半のパブリック・イメージは正にエイリアンだった。

ニコラス・ローグはボウイ主演で『地球に落ちて来た男』を撮ったが、これはボウイ以外は考えられないハマリ役だった。この映画のボウイは年をとる速度が遅く、周辺の人々が老化していくなかで、一人孤独のなかに生きていくわけだが、現実のボウイは映画のあと、残酷に加速する老いを逃れきれていない。今のボウイは地上に打ちすえられている。

逆に、33歳になっても、その成熟とは逆に表情が以前よりも若くつややかになっているかに見えるのがカイルだ。

このカイルの顔が、夜食用ドーナツのおびただしい量と共に『ツイン・ピークス』の地上離れ、現実離れの一因であろう。

『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』は新旧の〝SF顔〟の共演映画となる。

筆者はカイルの来日時、インタビューの機会が与えられたのだが、まったく作品のイメージそのままなのに感嘆した。画面との落差に驚くことが多い俳優の素顔だが、作品の表情と一ミリの誤差もない。誤差がなくしかもより若いのだ。

きわめて美しいレプリカント顔といっていいか。笑うとあの不可解なまでにイノセントな微笑が顔全体に広がる。

リンチが惚れたのは無理もない。

リンチは、フラットな表情の裏に複雑な闇を読み込み、妄想していく快楽をカイルの顔に見出したのだ。それが『ブルー・ベルベット』のテーマそのものになった。

二人の言葉がぶつかる度に、筆者に先にどうぞと譲ってくれる程に、カイルは礼儀正しい。

女は好きだがセックスはそれほど強くないとのことだが冗談か本気かよくわからない。女が好きというのはリンチの保証付だ。来日のとき女性ファンとの出会いの場でファンの胸のブローチを感心しつつ、それに触れた指がスーッと乳首を探り当ててから離れたそうだ。

最高ではないか!?

カイルの新作はこの秋か冬に欧米で公開予定のフランツ・カフカ『審判』である。カイルが演じるのはもちろんヨゼフKだが、このキャスティングは素晴しい。カフカの登場人物はすべて、ミステリアスなまでに空虚な記号だが、カイルの存在感こそがまさにカフカ的だからだ。

すでにオーソン・ウェルズ／アンソニー・ホプキンスの傑作が存在するにもかかわらず、監督のデビッド・ジョーンズ（『チャリング街84番地』）が『審判』に挑戦しようと思ったのは、カイルあってのことにちがいない。

このカイルの『審判』出演にリンチは幾分、虚をつかれた思いをしているかもしれない。というのはカフカはリンチ最愛の作家といっていいからだ。

とはいえ、カイルはカフカ俳優として、自分を染めあげてくれたリンチの『ツイン・ピークス』に、『審判』撮影中、幾度も感謝するにちがいない。地上離れしたイノセントな微笑を顔面に広げ、犬のように殺されながら。



DO YOU KNOW 'TWIN PEAKS'?

Key word 5: The tender bows of innocence burn first and the wind rises—then all goodness is in jeopardy.

ツイン・ピークスは架空の町である。
ワシントン州、スポキャンのそばに位置するスノコルミーという小さな街。
リンチ監督が幼少の頃住んだこともあるこの地がモデルであり、主なロケ地となった。
物語に出てくるメインの建築物はそこに実在している。
『ツイン・ピークスの歩き方』という遊び心いっぱいの、本格的ガイドブックも登場した。
今、この町を訪ねたら、アイパッチをした人や、
丸太を抱えたおばさんに、会えるような気がしてならない。



パッカード製作所

タイトルにも登場する町の象徴・パッカード製材所。
そこは、ツイン・ピークスの人々の果てしない欲望と陰謀が渦巻くところである。
ロネットの父も働くこの製材所は、多くの従業員をかかえた、町一番の大企業といえるだろう。
パッカード族とは、その昔、ツイン・ピークスの町を最初に拓いた２つの家系のうちの１つである。
経営者のアンドリューはその子孫なのだが、
彼がボート事故で死亡したとされた後は、２人の女性がここを引き継いだ。
１人は、アンドリューの妻、ジョシー・パッカード。そしてもう１人は、妹のキャサリン・マーテル。
財力に加え、２人の不仲も手伝い、製材所には、様々な人々の欲と企てが暗躍している。思わぬ生存。思わぬ裏切り…。
それは、放火によって全焼するという不幸に見舞われた後も、
ツイン・ピークスの人々の野望の対象としての君臨し続けるのである。



町の入口

ツイン・ピークスの町の入口。映画では、２つの山を描いた絵の看板が立っている。
カナダ国境から南に８キロ。旅行者をやさしく迎え入れようとしているかのようだ。
人口5,120.1人の田舎町。背後には、妖しげな山と森がうっそうと繁っている。
クーパーが初めてこの地を訪れた時、その名前を尋ねた〝ベイマツ〞。
町の周辺に棲息する最も大きな樹木で、フクロウが巣を作ることで有名でもある。
「ここの森には気をつけろ」静寂と神秘と畏怖が、森には宿っている。
一見穏やかなこの町に、悪魔が棲んでいるなんて、一体誰が想像するであろうか。

ダブル・R・ダイナー

郡道Ｊ線沿いにある〝ダブル・Ｒ・ダイナー〞。町の人々が集う憩いの場所である。
ツイン・ピークスを訪れて、ここに寄らないのは話にならない。
美しい女性経営者のノーマが努力して、古き良きダイナーを維持している。
クーパー捜査官のお気に入りはチェリーパイ。コーヒーも絶品。もちろんドーナツ類も。
だが、ノーマの周辺にも、一筋縄ではいかない恋愛問題やトラブルがいっぱいだ。
この店で働く、チャーミングなシェリーも同様の悩みを抱えている。
そればかりでなく、彼女たちには恐ろしい犯罪の影も忍び寄るのである。





スノコルミーの滝

オープニングのタイトルバックで印象に残る壮大な滝。
その名を〝白い尾の滝〞と呼ばれ、町の北西部に位置する。
実際のロケ地でも観光名所になっている。
ツイン・ピークスという町の〝神秘的な美しさ〞が迫ってくる景観。
この１枚の強い映像から我々は、霊気漂うリンチの世界にひきずり込まれてゆく。
そして、更に滝からカメラがずーっと引いていくと、
背後にグレート・ノーザン・ホテルが姿を現わす。
そのどこか不気味な雰囲気は圧巻である。

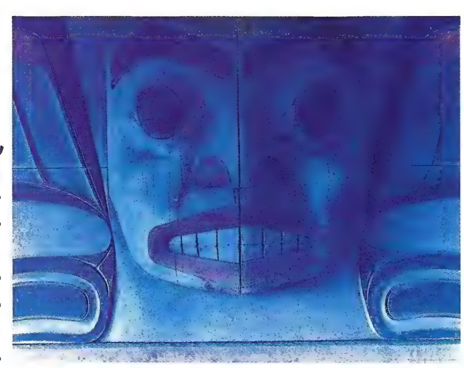


鉄橋

ロネット・ポラスキーが発見された州境の鉄橋。
彼女は、手首に縄を巻きつけたまま死霊のように歩いていた。
その顔に血の気はなく、意識もほとんどない。
殺されたローラと同じ現場から、なぜ彼女だけが逃げられたのか、
それは、この映画の中で明かされている。
ほとんど人影もない、静かな山々に囲まれた鉄橋。
そこにぼろぼろの下着姿で現れるロネットの姿は、あまりに悲劇的でつらい。

グレート・ノーザン・ホテル

ツイン・ピークスでの宿泊といえば、グレート・ノーザン・ホテル。
最も優雅で完璧な宿泊施設がととのっている。
クーパーが滞在している部屋は、シックで美しい木目調の内装だが、
あちこちに、アメリカ先住民の遺品である奇妙なお面が飾られ、神秘的でもある。
そして、このホテルにも経営者のベン・ホーンを中心に様々な策略が蠢めいている——。
実際のロケは、外観をスノコルミーの滝の上に実在するサリッシュロッジで、
内部をシアトルのキアナロッジで撮影している。

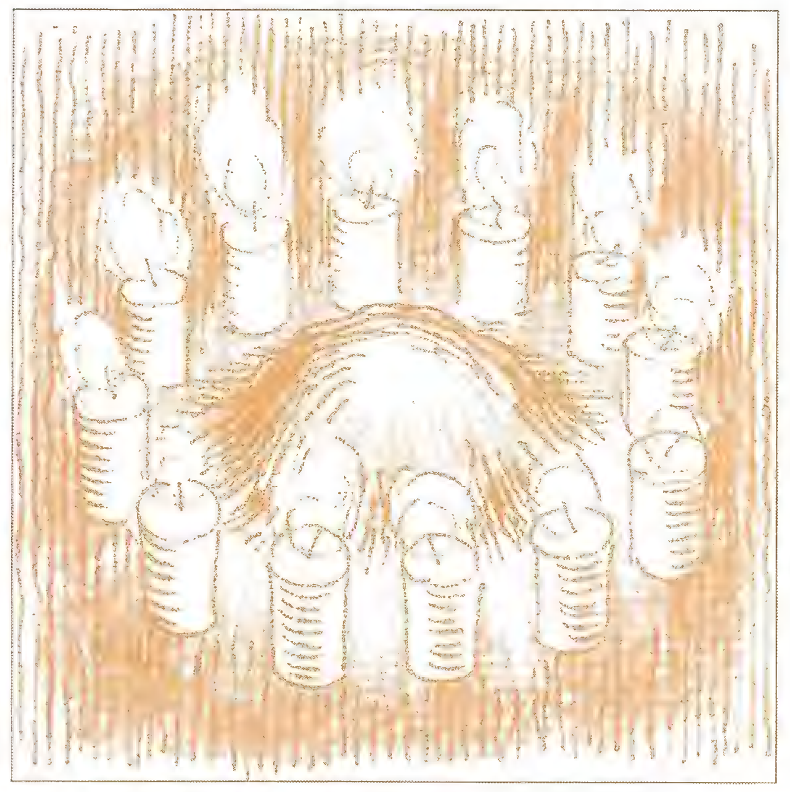






ROAD MAP





殺害現場に残された盛り土

ローラの殺害現場に残された、直径45センチの〝盛り土〟をご記憶だろうか。
上には割れたハートのネックレス。
近くに〝火は我と共に〟の血文字。
クーパーは「初めて見る物だ」とつぶやく。
だが、その1年前、テレサ事件の現場にも同じ〝盛り土〟が存在していた。
しかもそれを見つけたデズモンド捜査官は、
上にのせられたテレサの指輪にふれた瞬間消えてしまったのだ。
一体彼はどこへ?
盛り土の意味するものは?
そこにどんなメッセージが込められているのか──。

3つめの謎の足跡

ローラ殺害現場に残されていた3つめの謎の足跡。
それは、ボブの凶行を阻止しようとした片腕の男、
フィリップ・マイケル・ジェラードのものであった。
ジェラードは、一心不乱に森を走ってきたが、
時すでに遅く、ボブの狂気は止められない。
貨車の戸をこじ開けると、ロネットがなぐられて転げ落ちてきた。
彼女は、頭をひどくぶつけた。
が、命からがらロネットは逃げ出すことができた。
そしてボロボロの下着姿で鉄橋を渡っているところを発見、
保護されるのであった。



FOREST MAP



1. グレート・ノーザン・ホテル
2. ホワイト・テイル・フォールズ
3. ブラック・レイク・ダム
4. パッカード製材所
5. パッカード地所
6. ツイン・ピークス・タウン・ホール
7. フクロウの洞穴
8. グラストンベリー・グローヴ
9. 機関車の墓場
10. 旧アングウィン空軍基地

引き裂かれた日記

ローラのすべてが記された〝私的な日記帳〟。
そのページを引き裂いたのは、他ならぬボブであった。
外出せず、家の中でランを育てる不思議な青年、ハロルド・スミス。
日記は彼の助言によって始められていた。
誰にも見つからぬようドレッサーの裏に隠したが、
ボブの魔の手は容赦しない。
ローラはボブが実在することを確認しておびえている。
彼女は、ボブが知らないハロルドに日記を託すことにした。
そのことが、彼の運命を大きく狂わすことになるとも知らずに。



TOWN MAP



1 グレート・ノーザン・ホテル
2 ホワイト・テイル・フォールズ
3 この先にブラック・レイク・ダム
4 ツイン・ピークス・タウン・ホール
5 グレーンジ
6 弁護士リーランド・パーマーの家
7 空軍少佐ガーランド・ブリッグスの家
8 医師ウィリアム・ヘイワードの家
9 ツイン・ピークス・ハイスクール
10 ブラック・レイク霊園
11 ツイン・ピークス保安官事務所
12 北公園
13 ガゼボ
14 南公園
15 郷土博物館
16 ブックハウス
17 旧停車場
18 ダブル・R・ダイナー
19 ロードハウス
20 ホーン・デパート
21 カルフーン記念病院
22 この先にパッカードの地所あり
23 この先にパッカードの製材所あり
24 この先にフクロウの洞穴あり
25 この先に機関車の墓場あり
26 この先にゴーストウッド国有林あり
27 ハロルド・スミスの温室と家
28 デッド・ドッグ・ファーム
29 ビッグ・エドのガソリンスタンド
30 この先にアングウィン空軍野外観測所（UFOあり）
31 旧アングウィン空軍基地

［謎、キーワード、伏線、暗示、思わせぶり。『ツイン・ピークス』には、様々なしかけが詰まっている。それらが、映画『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間』の中で、解決したり、明らかになったり、ますます謎めいたり、置いてきぼりにされたり…する。何しろ映画製作は、世界初の日本公開直前まで全く極秘裏に進行した。これらのエピソードは、リンチ＋ロバート・エンゲルスのシナリオから構成されている。すでに〝映画〟を見終わったあなたは、新たな〝謎と真実〟をいくつ見つけることができたのだろうか。］

OWL CAVE



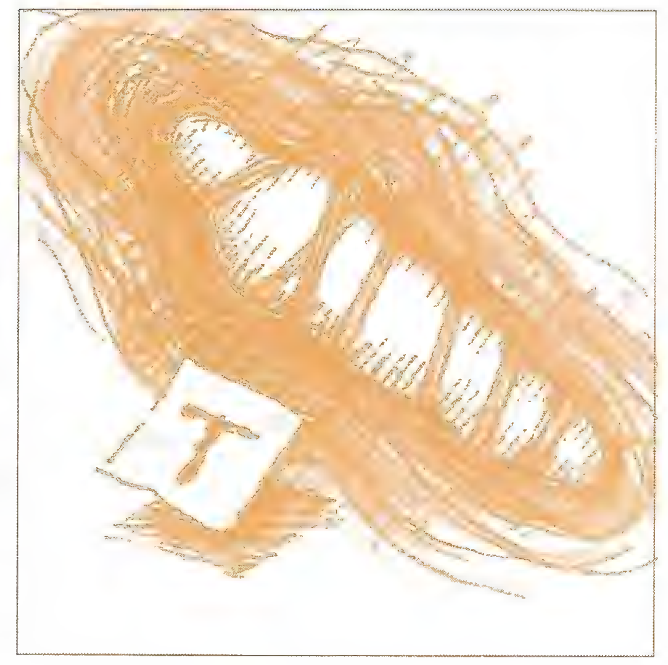
フクロウの洞穴にあった壁画

発見された壁画はツイン・ピークスの町の地図にもなっていて、ブラック・ロッジの位置を示していた。これと同じ模様が、なんとテレサの指輪にも描かれていた。



ボビーが犯した殺人とは？

「名前は知らない。ボビーが男を殺したと言ったそうだ」
ローラの事件直後、捜査の手から逃れようとしたジェームズが、
暗闇の中でドナに語った話。
実は、ローラの麻薬への強い欲望が引き起こした〝殺人〟だった。
森の取引場所に現れたディア・メドウの副保安官を動揺したボビーが撃ってしまったのだ。
だが、2日後のローラの死で街中が騒然となったためか、
この事件は、人々の記憶から消え去ってしまったかのようにみえる。
ローラ亡き後、そのことを知っているのはボビーだけなのだから。



クーパーの予言

捜査官になっていなかったら、
魔術師か神秘家になっていたかもしれないというくらい、
クーパーの捜査法は、夢や直感、洞察力に満ちている。
超自然の力が加わったローラの事件解明には、
彼のこの特異な力が大いに役立った。
しかも1年前にテレサ事件も捜査した彼は、
「犯人はもう一度現れる」と予言。
この痛ましいローラ事件についても具体的に予想していたのだ。
「次の犠牲者は高校生。髪はブロンド。
セクシーで活発な娘、ドラッグをやっている。助けを求めて呼んでいる」と。

WELCOME TO RYNCH WORLD

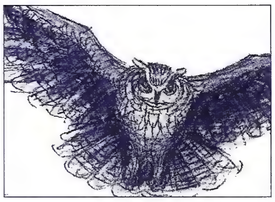
Key word 6: Ring··· ring··· Don't take the ring···Laura.

駒鳥も見かけと違う……
リンチ・ワールドへの誘い

今野　雄二



デビット・リンチ作　煙の形#1
Smoking Shapes #1　1987 Chalk on paper 143×98cm



フクロウは、即ちボブは、
見かけと違う！のである。

『ブルー・ベルベット』の実質上のラスト・シーンで、午睡から目覚めた主人公の青年ジェフリーに、ガール・フレンドのサンディが窓の外に駒鳥が舞い降りたことを告げる。

彼女にとって駒鳥は恋愛を表わし、愛の光をもたらすものであった。その駒鳥をまのあたりにして、しかし彼女は一瞬だがたじろぐ――その嘴には、もがき苦しむ一匹の黒い虫がくわえられていたからだった。

「この世の中って本当に奇妙ね」というサンディがその直後にジェフリーに向かって呟やいたひと言は、彼女も駒鳥が見かけ通りのものではないこと――即ち、現実が目に見えるだけのものではないことに、ようやく気付いたことを物語っている。

ジェフリーの家の庭で虫を食べ終えたその駒鳥が、次にどこに姿を現わしたかといえば、あの有名なTVシリーズの最初のショットからも明らかなように、ツイン・ピークスと呼ばれる町であった。

デビッド・リンチが主人公ジェフリーの白昼夢という形で描き出したドラッグとSMセックスがらみの邪悪な倒錯美の世界は、目の前の現実が目には見えないもうひとつの顔を秘めていること、換言すれば、この世は見かけと違うことを、甘美な毒の如くに表現したものである。

町一番の美少女ローラ・パーマーを殺したのは一体誰か、という魅力あふれるミステリー・ドラマとしてスタートした『ツイン・ピークス』もまた、例の駒鳥がその幕開けのファースト・ショットを飾ることからも明らかなように、『ブルー・ベルベット』に於いて明らかとなった〈現実は見かけと違う〉というリンチ美学を引き継ぎ、更に拡大したものと受けとることができるだろう。

いよいよミステリーも佳境に・・・ともいうべき第8話、TVの第2シーズンの幕開けでリンチは、謎の巨人を主人公たるFBI捜査官デイル・クーパーの目の前に出現させ、かく語らせる――「フクロウは見かけと違う」

続く第9話でリンチはそのフクロウの顔をあの〝ボブ〟の顔に重ねて見せるのだが、この身の毛もよだつ一瞬のイメージこそ、『ツイン・ピークス』のミステリーの核ではあるまいか。

フクロウは、即ち〝ボブ〟は見かけと違う！のである。

ローラ・パーマー殺人事件の謎は、実にその瞬間、リンチ自身によって解き明かされてしまっていたといっても過言ではあるまい。

フクロウというキー・ワードをもたらした巨人の存在は、その直前にミルクを運んできた背の高いルーム・サーヴィスの老人を眺めて、朦朧とした意識のデイル・クーパーが自ら生み出した幻影である。

切り落とされた耳と妖婉なクラブ・シンガーを眺めて、現実の向こう側までを覗き見してしまったジェフリーが、デイルの若き日の姿であった、といって誰がそれを否定できるだろうか。

ランバートンという製材の町、まるでツイン・ピークスとはその名の通り双生児の姉妹のような町で、ミステリーと倒錯した快楽に引き込まれていくジェフリーに向かって、サンディがいう――「あなたって探偵なのか、変態なのかわからなくなっちゃった」

『ツイン・ピークス』を眺めながら誰かがデイル・クーパーに向かって、思わず同じ問いを囁やきかけたくなったとしても、それはリンチ美学上、当然の成りゆきかも知れない――「あなたって探偵なのか、犯人なのかわからなくなってしまった」

何事に於いても、決めつけ断定することを極力嫌うリンチであれば、恐らくにやりと笑いながら、どちらも可能性があるねと答えるかも知れない。

もっとも、カイル・マクラクランというリンチ自身のドッペルゲンガーの如き俳優がデイルを演じているという事実を見逃す訳にはいくまい。ジェフリーからデイルへの変身の鍵ともいうべきサイキック・パワーが、それ以前にすでにリンチによってジェフリーに埋め込まれていた、とすれば・・・　、そう、『砂の惑星』でマクラクランが演じたポールである。

リンチ自らが失敗作と認めるSFの救世主誕生ドラマ『砂の惑星』はしかし、サイキック・パワー及びそれに伴うインナー・ヴォイスとしてのモノローグの活用、変態過程も含むいわゆるフリークスの氾濫、重低音のノイズ効果と相俟った浮遊／落下感覚の描出など、イメージの造形あるいはムードの醸成、テクニックの駆使といった点からも現在のリンチ・ワールドの基盤ともなった作品として、筆者がかねて偏愛の対象としてきたものである、と告白してしまおう。

それに先だつ『エレファント・マン』、そして初めての長編でもある実験的かつ前衛的作品『イレイザーヘッド』を経て培われたリンチ・ワールドを構成する諸々の要素が、『砂の惑星』の製作過程に於いてことごとく検証された、という趣きである。

かくして構築されたリンチ・ワールドを、創造主たるリンチが初心にたちかえり、『イレイザーヘッド』の視点から眺め返したとき、リンチ・ワールドも見かけと違うという発想がひらめいたかどうか、はともかくとして、彼は『ブルー・ベルベット』という、あたかも基盤を裏返しにした如き倒錯的な傑作を生み出してしまった。

RYNCH'S PHILMOGRAPHY



デビッド・リンチ　DAVID LYNCH

1946年1月20日、モンタナ州ミズーラに生まれる。
幼少の頃から画家にあこがれ、ハイスクール卒業後、ワシントンのコーコラン美術学校、ボストン美術館付属美術学校、フィラデルフィアのペンシルバニア・アカデミーに通って勉強。フィラデルフィアの刺激的な街は、彼のその後の作品に大きな影響を与えた。また、学生時代、絵画の勉強上1分たらずのアニメーション・ループ・フィルムを作ったのが、彼の初の映画的試みとなった。

67年『アルファベット』を作った後、70年にロサンゼルスに移り、本格的に映画の勉強を始める。72年から4年間に及んだ初の長編映画『イレイザーヘッド』がメル・ブルックスの目に止まり、『エレファント・マン』へとつながることになるのである。

尚、リンチの『砂の惑星』や『ツイン・ピークス』での俳優顔負けの怪演は有名であるが、『ブルー・ベルベット』以来の恋人イザベラ・ロッセーニの誘いで88年、『ゼリーと私』（日本未公開）に彼女の恋人役で出演している。

また、学生時代に結婚していたペギーとの娘ジェニファー・リンチが、『ローラの日記』を出版。更に彼女が映画監督としてデビューすることも大きな話題である。

●MOVIE

1967年『アルファベット』The Alphabet 4分/カラー/16ミリ
1970年『グランド・マザー』The Grandmother
34分/カラー/16ミリ
1976年『イレイザーヘッド』Eraser Head　90分/モノクロ/35ミリ
(完全版は100分)奇怪な赤ん坊が登場する初の長編映画。
1980年『エレファント・マン』The Elephant Man
124分/モノクロ/35ミリ　象人間と呼ばれた青年の数奇な運命を描く。
米アカデミー賞8部門でノミネート。
1983年『砂の惑星』Dune　134分/カラー/70ミリ
壮大なスケールの宇宙闘争。カイル・マクラクランのデビュー作。
1985年『ブルー・ベルベット』Blue Velvet
121分/カラー/35ミリ
野原で人間の耳を拾った青年が踏み込む異常な世界。米アカデミー賞監督賞ノミネート。
1989年『ワイルド・アット・ハート』Wild at heart
135分/カラー/35ミリ　ヤクザ者の男と娘の愛の逃避行。
カンヌ映画祭で最高栄誉であるパルム・ドールを受賞。

●TV

1989〜1991年『ツイン・ピークス』Twin Peaks
1990〜1991年『アメリカ年代記』American Chronicles

WET AT HEART

Key word 7: Fire walk with me.

ウェット・アット・ハート
悲しいホラー映画

川本 三郎

デビッド・リンチを、「エントロピーを美に変えた男」と評したのは確かピート・ハミルだった。エントロピーとはもともとは熱力学の言葉だが、現在ではより広く、無秩序、乱雑、不確かさなど負の要素を指している。デビッド・リンチは確かに、普通は、汚い、醜悪、わけがわからないと忌避されるものにこだわり、それを映像のなかで、魅力的な異物として描いていく。

『イレイザーヘッド』（76年）の胎児のような赤ん坊、『エレファント・マン』（80年）の業病に取り憑かれ顔が醜く変形してしまった男、『砂の惑星』（83年）の腐敗した胎児のようなモンスターやミミズが巨大化したような砂漠の軟体動物、『ブルー・ベルベット』（85年）の酸素吸入器をつけた変質者、『ワイルド・アット・ハート』（89年）の小人や奇型者。デビッド・リンチの映画にはいつも異物があふれている。いやあふれているというよりしみでているといったほうがいいかもしれない。デビッド・リンチはそうした異物たちを通常のホラー映画のように仰々しく描かないからだ。デビッド・リンチの描く異物たちはみんないつも悲しい存在である。『イレイザーヘッド』のあの小さなフリークが赤ん坊のように悲しい声で泣いたように、『エレファント・マン』の背の低い少年がいつも人目を避けようとしていたように、デビッド・リンチの映画に出てくる異物たちはみんなどこか悲しい。

そしてこの『ツイン・ピークス』も形容矛盾を承知でいえば〝悲しいホラー映画〟である。決してグロテスクでも、ポップでも、異常趣味でもない。『ツイン・ピークス』は暗く湿った、重く悲しいホラーである。孤独や疎外が描かれているから悲しいという以上に、あの小さな町全体をおおいつくしているのが、言葉にはならない大きな悲しみの感情だからである。生きていること自体の悲しさ。しかもその悲しみの感情は殺人や秘密といった負の形でしかあらわすことが出来ない。

『ツイン・ピークス』は、冷たい川辺にビニールに包まれた17歳の少女ローラ・パーマーの死体が発見されるところから物語が始まる。ローラは誰かに殺されたらしい。通常のミステリーどおりに捜査が始められ、謎解きが行なわれていくのだが、徐々に、観客は謎そのものよりも、殺されたローラという少女の「不在」に心を奪われていく。

誰もがローラのことを知っている。ローラのことを語る。しかしそのローラは、観客の前にはつねに「不在」のヒロインとしてしか登場しない。つまり『ツイン・ピークス』は〝ここにはいない〟ローラという少女をめぐる物語なのだ。中心の不在。そのからっぽの印象が、終始『ツイン・ピークス』をおおっている。なぜかいつもかたかたと回転し続けているあのローラの家の扇風機。主人公がいなくなってもなお回転し続けているあの扇風機の空虚なイメージが、『ツイン・ピークス』を〝悲しいホラー〟にしている。

ドラマが深まるにつれ登場人物が次々に増えていく。関係者、友人、親類……ローラをめぐってたくさんの人間が登場する。そして人間がふえればふえるほど、中心にいるローラの存在が大きくなる。ローラの不在が強く印象づけられていく。ローラとは誰だったのか。本当にローラはいたのか。謎が深まるにつれてローラは、ちょうど『市民ケーン』の〝バラのつぼみ〟のようなシンボリックな謎になっていく。ローラはまるで不在の神のようにも見えてくる。写真とビデオのなかにしか存在しないローラはツイン・ピークスの町の人々の孤独な心が生んだ幻影ではないか。『ツイン・ピークス』が〝悲しいホラー〟なのは、不在のローラの圧倒的な印象のためである。誰もがローラになる可能性がある。たとえクーパー捜査官の活躍によって犯人が逮捕されたとしても、次に誰かが殺されたら、ツイン・ピークスの町はまた長い長い不安と悲しみにおおわれるだろう。中心の不在という不安におびやかされるだろう。『ツイン・ピークス』が通常のグロテスクなホラーに比べてはるかに人の心を不安にするのは、どこまでも〝中心がからっぽ〟だからである。理性的な解決も合理的な解釈も、中心の空虚さを埋めることが出来ない。人の心のなかにぽっかり空虚な穴が生まれてしまったように。

『ツイン・ピークス』の舞台は、ワシントン州のカナダ国境に近い小さな町である。頂に雪をかぶった山が見える。周囲は森に囲まれていて、町の唯一の産業らしい産業は製材業らしいことがわかる。ニューヨークやロサンゼルスに比べると〝ここがアメリカか〟と思うほど小さく、静かで、外界から忘れられているような町である。

アメリカ映画には「スモール・タウン・ホラー」と呼ばれるジャンルがある。閉ざされた小さな町で殺人が起きる。大都市での犯罪が、時代の病いのような先端的な犯罪なのと対象的に、スモール・タウンでの犯罪は、過去へ戻ったような土俗的な犯罪である。20世



紀の今日に18世紀や19世紀の殺人者があらわれたような。

デビッド・リンチは未来よりも過去の好きな監督である。それは『砂の惑星』がSFでありながらまるでゴシック・ホラーのような(いい意味で) 古めかしい映画だったことからもわかる。デビッド・リンチの描く宇宙船はまるで中世の宮殿のようだったし、『イレイザーヘッド』の町は『エレファント・マン』で描かれた19世紀ロンドンの町のようだった。過去に惹かれるデビッド・リンチが、『スモール・タウン・ホラー』に惹かれるのはよく理解出来る。『ブルー・ベルベット』の森に囲まれた小さな町(あの町も製材の町だった)、『ワイルド・アット・ハート』の中西部の砂漠のなかの小さな町。どちらの町も、時代から取り残されたような、さびれた町だった。

そして『ツイン・ピークス』のカナダ国境に近い、森のなかの小さな町。人口は少なく、町の様子も1950年代といってもおかしくないくらい現代から少しずれている。鉄道の廃車がある。さびた鉄橋がある。製材所すらもう活動をやめようとしている。かつては栄えたことがあるのかもしれないが、いまは過去のなかに沈んでいる。ローラの家の扇風機は壊れてかたかたと空しく回転し続けているし、病院の蛍光灯も壊れてちかちかしている。そしておそらくは町の人の心もどこかもうとうに壊れてしまっていて過去の闇のなかに沈んでいる。

クーパー捜査官は外の世界からこの小さな沈んだ町にやって来る。外からの来訪者であり、ストレンジャーである。だからこの町の特異な雰囲気に敏感になる。「木が多い」と彼はまずいう。この町が、森に囲まれていることに気がつく。森という大自然のなかのかろうじての文明の場としての町。夜になると森の闇に包まれて、何が起きてもおかしくない。それは、ちょうどスティーブン・キングのホラーが、東海岸メイン州のカナダ国境に近い、森に囲まれたスモール・タウンを舞台にしているのに似ている。キングの読者ならツイン・ピークスの町を、メイン州のキャッスル・タウンに重ね合わせることが出来るだろう。惨劇はいつも〝森の力〟によって行なわれる。だから、ローラは、人間に殺されたというよりも、森に連れ去られたのだということが出来る。ロネットが襲われる場所も、寂しい森のなかに捨てられた廃車である。ツイン・ピークスの町の人々は森を利用しながらも、〝森の力〟におびえている。それは穏やかな自然のなかで暮しているわれわれには想像も出来ないような、彼らの根源的な不安である。〝自分たちはいつ森のなかに連れ去られるかわからない〟。

『ツイン・ピークス』の映像はいつも暗く、湿っている。太陽の光は、ほとんどささない。これほど湿ったアメリカ映画はマイケル・チミノの『ディア・ハンター』かジョン・ブアマンの『脱出』くらいしか思い浮かばない。ツイン・ピークスの町を取りまく森や林は、いつも小雨に濡れている。道路も湿っている。オートバイは昼間なのにライトをつけている。グレート・ノーザン・ホテルは滝の水しぶきを浴びていつも湿っている。季節は冬らしい（それなのに扇風機がまわり続けている)。枯れた木が多い。川の水は冷たそうだ。遠くで霧笛が鳴っている。これほど冷たさ、湿気にこだわった映像も珍しい。この映画が〝悲しいホラー〟になっているのは、このウェットな映像の印象も大きい。

その冷たい、湿った小さな町で人びとは、それぞれに秘密を抱えこんで生きている。子どもは親を裏切っている。夫は妻を、妻は夫を裏切っている。そして何よりも、ローラにまったく違うもうひとりの秘密のローラがいることがわかってくる。ここでは誰もが相互にストレンジャーである。心が冷めきっている。外から来たクーパーですらそうだ。いつもテープに吹き込むときに呼びかけるダイアンなど本当はどこにもいないのかもしれない。不在のダイアンは不在のローラに対応している。

はっきりあるのは、森と夜の闇だけだ。森と闇に象徴される過去だけだ。そして、不在のローラにかわって中心にいるローラの死体だけだ。デビッド・リンチはネクロフィリア（死体愛好）の監督ともいわれるが、彼は、死体に象徴される過去が好きなのだろう。過去という闇にとらわれているのだろう。ミステリーとは、死体の発見から過去へとさかのぼる物語であることはいうまでもない。この映画の副題が『ローラ・パーマー最期の７日間』となっているのはその意味でデビッド・リンチにはふさわしい。この作品が〝悲しい〟のは、われわれが、どんなに未来に向かって生きようとしても、結局は、過去にとらわれ、過去の闇のなかに引きずりこまれていく存在なのだと思い知らされるからなのだろう。もちろん、その過去の中心もまたからっぽであるに違いない。

カイル・マクラクラン
［デイル・クーパーFBI特別捜査官］
最新インタビュー



**犯人は誰か？
僕たちは知らなかった。**

■何故、『ツイン・ピークス』は、こんなにも人気がでたと思いますか？

カイル・マクラクラン（以下、K）――まず、第一にすごい作品だからさ。それにとてもアメリカ的で、多くの人の心に触れる作品だからだと思う。アメリカの田舎、その奥深くを描いているから。

■あなたはクーパーに似ていますか？

K――とても近い存在だ。似ている所もあるし。クーパーはドーナツが好きで、ぼくはコーヒーが好きといった所が似ているかな。（笑）

■リンチ監督から初めて『ツイン・ピークス』のプランを持ちかけられた時、どこまで中身に突っ込んだものだったのですか？

K――最後までは教えてくれなかった。ずっとテレビシリーズを撮影中、秘密を明かそうとはしなかった。犯人は誰か？僕たちは知らなかった。

■映画『ツイン・ピークス』の誕生のきっかけは？

K――映画にしたのは、『ツイン・ピークス』の物語を取り上げて、とても興味深く、ダークでエロチックで、ミステリアスな作品を作りたかったから。それに『ブルー・ベルベット』以来、誰も見る事がなかった奇妙な作品だからだ。

■デビッド・ボウイ、キーファー・サザーランド、ハリー・ディーン・スタントンなど新しいメンバーとの共演は楽しめましたか？

K――すごく楽しかった。誰もが興味深い人物で、『ツイン・ピークス』に与えられる物が沢山あったと思う。彼等自身のエキセントリックな部分も良く出ている。僕自身、彼等と仕事をする事は、とても大きな刺激になった。僕たちはずいぶん長く『ツイン・ピークス』をやってきたので、彼等の新しい血が僕たちを若返らせてくれた。そしてテレビ以上に映画を、面白い味に仕上げてくれた。連中はすごいよ！

■デビッド・ボウイについて、もう少し詳しくお聞きしたいのですが？

K――二人でいくつかポラロイドを撮影した。もし、公表されるような事になったら、我々がおおいに困難な状況に追いやられるだろうが（笑）。僕とボウイは同じようなユーモアのセンスがあって、かなりうまくいったんじゃないかな。

■あなたが映画『ツイン・ピークス』で演じているシーンについて？

K――内容を明かしてしまわないで、どのように説明すればいいかな。（しばらく考えて）僕の視点から見ると、クーパーはとても自制心が強く、コントロールも効いている。そんな彼がローラを見ると、彼女はようやく彼女の夢の幾つかを実現できる。我々もその全てを体験できる。つまり彼女の最期の7日間を、知る事ができる。この映画はテレビシリーズのどのエピソードよりも、力がこもったものだと思うし、もう一つ話すと映画を理解するためにテレビシリーズを見る必要はない。あまり答になっていませんね。（笑）

■映画とテレビの違いは？

K――映画の方が全ての点で、優れている。全ての描写が過激です。

■映画『ツイン・ピークス』の見どころは？

K――あらゆるドラマチックな事柄が、ローラ・パーマーの死へとつながっていく。みんなが関心を持って見たいと思っている事、興味を持っている事が、やっと見られる映画だ。ミステリアスでエロチックで、ダークのイメージが明らかになる。リンチ監督としても、この作品がベストだと思う。その他にみんながとてもよく知っている登場人物が全員勢ぞろいしている。

■リンチ監督とはどんな人ですか？

K――彼はとても複雑な人間だ。色々なパーソナリティを持っていて、とてもオープンで、心優しい紳士である半面、とても暗く、痛々しい部分を持っている。そんな部分が映画にも表れていると思う。僕個人にとっては彼は、素晴らしい友人だ。

1992年2月26日

INTERVEW to
KYLE MacLACHLAN

シェリル・リー
［ローラ・パーマー］
来日記者会見

今までの自分と違う自分になったと思います。



■今回の映画『ツイン・ピークス』についてシェリル・リー（以下、S）――今回の映画はテレビシリーズに比べますと、本当に色々たくさんの内容を盛り込んであります。謎の存在であるボブはテレビシリーズの中では、はっきりとした正体が描かれていませんが、この映画の中ではボブとローラの関係が細かく描かれていきます。

■具体的な映画の話は、リンチ監督からいつ頃あったのですか？

S――91年の春に具体的に企画が出て、リンチ監督とローラ・パーマーの少女時代について、色々な見方で話し合いました。映画『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』では、初めてその点が詳しく描かれています。あとは、ドラッグのことなど、深く掘り下げてあります。

■デビッド・リンチ監督との出会いのエピソードを、お聞かせください。

S――当時シアトルに住んでいまして、舞台に出演していたのですが、その時リンチ監督からエージェントを通じて電話がありました。彼は私の写真を見て興味を持ったらしいんです。その後お会いして、このローラ・パーマー役をいただきました。その時『ツイン・ピークス』のストーリーなどにつきましても基本的なお話は伺いました。確か、死体の演技はどう？というオファーだったと思います。役自体は、凍えそうな冷たい水の中で演技をしなければならず、苛酷な状態だぞと言われましたが、リンチ監督の映画は前から好きだったので、すぐOKをしました。

■映画『ツイン・ピークス』のリンチワールドについて

S――もちろん映画は、リンチワールドがおもいきり展開されています。テレビには、放送コードの問題がありますので、ローラ・パーマーの役自体もテレビでは描かれなかった多くの面が思い切って描かれています。ローラ・パーマー自身が何故、破滅的な道を進んだかという事について、その背後が綿密に説明されていて、ローラには相当な苦痛を伴う経験があったという事にも触れています。

■ローラ・パーマーを演じてあなたは変わりましたか？

S――今までの自分と違う自分になったと思います。それは、自分の中にある人間が誰でも持っているダークサイドというものを探求する事ができ、その部分に直面して自身を裁いたりするよりも、それと一緒に生きていくという事を学んだ気がします。

■映画の中で初めて生きているローラを演じるわけですが、役作りで難しかった事は？

S――デビッド・リンチ監督の娘であるジェニファー・リンチが書いた『ローラの日記』という本がありまして、それが今回の映画の為のリサーチに大いに役立ちました。それをいつもセットに持ち歩いて、役が解らなくなったらそれを見返して、それを頼りに役作りに励みました。映画では実際にテレビで殺されてから、1年のブランクがあってから撮影に入りましたので、その間に殺された自分の役（ローラ）の過去について充分に考察しながら役作りができ、それも非常に素晴らしい経験でした。それに映画『ツイン・ピークス』は、テレビシリーズと比べてみてもとても面白いポイントが描かれています。いろいろな見方ができて、最終的に完結する世界ができあがっていくのですが、その中で映画にはローラ・パーマーの過去・現在・未来が描かれていきます。

■世界で最初に映画『ツイン・ピークス』が公開される、日本のファンへのメッセージを！

S――デビッド・リンチ監督にこんな事を言われました。「ベルトをしっかり締めろ。道は険しいぞ。」実際の撮影に携わってみて、今まで答えられなかった謎の答がたくさん詰まっています、それはまるでパズルの空いている部分を、ちゃんと埋めてくれるような感じです。私が撮影で楽しんだのと同じように、皆さんも劇場で楽しんでいただけると思います。

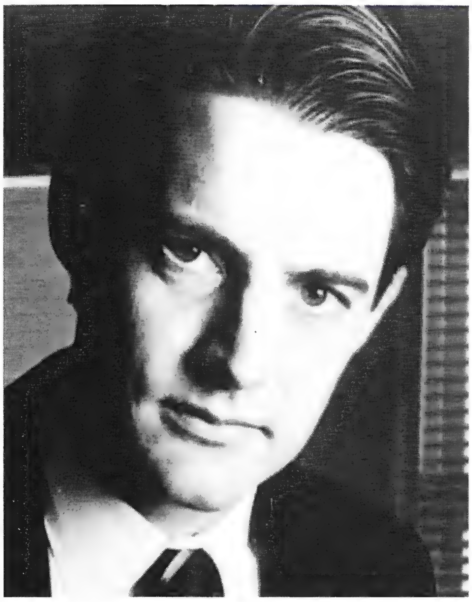
1992年3月18日／帝国ホテルにて

INTERVEW to

SHERYL LEE

CAST PROFILE

Key word 8: You stole the corn. I had it canned above the store.



カイル・マクラクラン ● KYLE MacLACHLAN

デイル・クーパーFBI特別捜査官

「ダイアン、今4時20分だ。テレサ・バンクスの死体が発見されたウィンド川に立っている。ダイアン、この事件は私に何だか妙な感情をいだかせる。爪の下にあった文字を見ると、犯人はもう一度現れる様な気がしてならない。しかし、いつ、どこでなのか誰にも解らない。」

ローラ・パーマー殺害事件に挑む、FBIのデイル・クーパー捜査官を演じる。ワシントン大学卒業後、シェークスピアの舞台に出ている所をスカウトされ、'83年デビッド・リンチ監督作品『デューン砂の惑星（DUNE）』の主役で映画デビュー。リンチ監督とは、'85年の『ブルー・ベルベット（BLUE VELVET）』、テレビシリーズの『ツイン・ピークス』、そして今回の映画作品と4度目のコンビである。その独特な感性に満たされた演技は、リンチ組の看板俳優として、ますます評価が高まっている。その他の主な作品に、ジャック・ショルダー監督のSFアクション『ヒドゥン（'87/THE HIDDEN）』、スティーブ・グッテンバーグ主演の『恋のためなら（'90/DON'T TELL HER IT'S ME）』、オリバー・ストーン監督の『ドアーズ（'91/THE DOORS）』などがある。



デビッド・ボウイ DAVID BOWIE

フィリップ・ジェフリーズ

「指輪・・・夢の中だよ。我々は夢の中に住んでいるんだよ。」

FBIの優秀な捜査官でありながら謎の失踪をしており、テレサ事件後クーパーの前に突然姿を現わす、フィリップ・ジェフリーズを演じる。1947年、ロンドン生まれ。ロック界のスーパースター。その怪しい魅力とミステリアスな美しさで、70年代前半にグラムロックのヒーローとして名声を得る。その後アーチストとして実力を発揮し、70年代の後半から80年代の前半にアメリカからアジアへと世界的な成功を収めた。映画出演も'75年の『地球に落ちてきた男（THE MAN WHO FELL TO EARTH）』から'83年の『戦場のメリークリスマス（MERRY CHRISTMAS MR.LAWRENCE）』『ハンガー（THE HUNGER）』、そして'86年の『ビギナーズ（ABSOLUTE BEGINNERS）』『ラビリンス（LABYRINTH）』など、実に多彩な役を、カリスマ的に演じている。92年2月来日公演を行なった。



キーファー・サザーランド KIEFER SUTHERLAND

サム・スタンリーFBI捜査官

「（テープレコーダーに向かって）テレサは頭蓋骨が割れている。おそらく鈍器のような物で何度も殴打されたためと思われる。年齢は16歳から18歳くらいか・・」

FBIの若手捜査官で、テレサ・バンクスの事件を担当する、サム・スタンリーを演じる。1966年アメリカカリフォルニア州生まれ。父親は『コールガール（'71/KLUTE）』『普通の人々（'81/ORDINARY PEOPLE）』等の個性派俳優のドナルド・サザーランド。本人も今、最も期待される若手スターとして主演作品が続いている。主な出演作品として、'86年の『スタンド・バイ・ミー（STAND BY ME）』'88年の『ヤングガン（YOUNG GUNS）』'90年の『フラットライナーズ（FLATLINERS）』『ヤングガン2（YOUNG GUN II）』などがある。

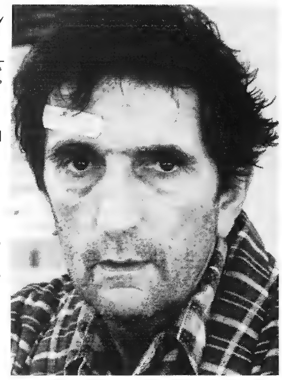


クリス・アイザック ● CHRIS ISAAK
チェスター・デズモンドFBI特別捜査官

「テレサ・バンクスは指輪をしていたはずだ。どこにいったか心当たりは？」

テレサ・バンクス事件を担当する、チェスター・デズモンドを演じる。
本作は、ロックミュージシャンとして高い評価を受けているアイザックの、
初めての本格的な出演映画である。
その他の出演作品に、
『愛されちゃってマフィア('88/MARRIED TO THE MOB)』『羊たちの沈黙('91/THE SILENCE OF THE LAMBS)』がある。

HARRY DEAN STANTON ● ハリー・ディーン・スタントン
カール・ロッド



「ちょうど悪い夢を見てたところだったんだ。」

テレサが住んでいた、トレーラーの管理人を演じる。
26年ケンタッキー州生まれ。50年代後半にデビューしてから、
30年以上に渡り、あらゆる役をこなす個性的な演技派俳優として活躍している。
カンヌ映画祭のグランプリを受賞した『パリ・テキサス（'84/PARIS, TEXAS)』に初主演。
その他の主な出演作品に、
'79年の『エイリアン（ALIEN)』'89年の『ワイルド・アット・ハート（WILD AT HEART)』などがある。



シェリル・リー ● SHERYL LEE
ローラ・パーマー

「ボブは本当にいる、私が12歳の時から私をオモチャにしている。(ささやくように)彼は私になりたいって・・・それができなければ私を殺すって」

被害者ローラ・パーマーの、最期の7日間を演じる。1967年4月ドイツに生まれる。
デビッド・リンチ監督の『ツイン・ピークス』と『ワイルド・アット・ハート（WILD AT HEART)』の演技で、
絶賛を集めている注目の若手女優。彼女の演じたローラ・パーマーは、ドラマの中の架空の女性ながら、エスクァイア誌が選ぶ今年の女性に選ばれた程話題になった。
そして今回の『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』で初めて、生きているローラ・パーマーを演じる。
その他の作品に、ケビン・クラインの恋人の1人を演じた『殺したいほどアイ・ラブ・ユー('90/I LOVE YOU TO DEATH)』がある。

JULEE CRUISE ● ジュリー・クルーズ
ガール・シンガー



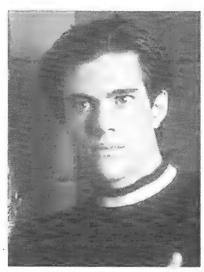
ロードハウスの歌手として、透明感あふれる美しい歌を披露している。

11歳の時からプロ歌手としてステージに立つ。舞台代表作に『キャバレー』『アニー』『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』など。
『ブルー・ベルベット』では、
彼女の歌う『ミステリー・オブ・ラブ』が悲しく流れ、観る者の心に残った。
リンチ作詞のアルバム『フローティング・イントゥ・ザ・ナイト』の大成功により、人生が変わったと言う。
この映画では、テレビシリーズ以上に印象的に登場し、
ミステリアスな歌声でシーンを一層盛り上げている。



最後の夜も
彼はローラの気持をつかみきれずにいた。
ローラが殺される数時間前に会っていた秘密の恋人。
バイク少年を演じている。
テレビ『SCHOOL BREAK SPECIALS』で主役を演じる。『ツイン・ピークス』以降の仕事も快調で
初主演映画『GLADIATOR』がヒットした。

ジェームズ・マーシャル
● JAMES MARSHALL
ジェームズ・ハーリー



麻薬にも手を出し、殺人事件も引き起こす。
厳格な家庭に育った反動からか、
反抗的な行動をとる不良少年を演じている。
テレビドラマの他にも映画『WAX WORK』、『テンプテーション15歳』('89/KEEP YOUR HANDS OFF MY DAUGHTER）などに出演。
家族全員が俳優という芸能一家に育っている。

ダナ・アッシュブルック
● DANA ASHBROOK
ボビー・ブリッグス

STAFF PROFILE

Key word 9: The owls are not what they seem.

デビッド・リンチ
DAVID LYNCH
［監督／脚本／出演］

1946年1月20日、米モンタナ州ミズーラ生まれ。
幼少時代をアイダホ州とワシントン州で過ごし、ハイスクール時代をノース・キャロライナ州で過ごした。
ハイスクール卒業後、リンチはワシントンのコーコラン美術学校、ボストン美術館付属美術学校、
フィラデルフィアのペンシルバニア・アカデミーに通い、アートを学んだ。
この時暮らしたフィラデルフィアは、本人日く「人種的緊張と暴力と恐怖に溢れる街」と語っており、リンチの作品に強い影響を与えた。
その後、学生時代にアニメーションのショート・フィルムを制作した事から、映画への試みが始まり、
以降映画監督・俳優・画家・舞台演出家・CMディレクターなど多方面に渡り大活躍を続けている。
『ワイルド・アット・ハート』において見事カンヌ映画祭グランプリを受賞、現在世界で最も注目されているアーチストである。
（主な映画監督作品はP 19をご覧下さい）



ロバート・エンゲルス
ROBERT ENGELS
［共同脚本］

ミネソタ州ミネアポリス生まれ。父親はノーザン・ステーツ・パワー・カンパニーの理事長、
母親はミネソタ大学を卒業した初の女性建築家という裕福で厳格な家庭に育った。
俳優志望だったエンゲルスは、ミネソタ大学で舞台美術の修士号を取得した後、奨学金を得て演技の勉強を続けた。
そして2年間役者として古典劇や現代劇に出演した後、ニューヨークへ渡る。
その後6年間で200本以上のCMと、2本の昼メロの番組に出演した。
（現在エンゲルスは、あの昼メロ出演は『ツイン・ピークス』の脚本を書く上で、たいへん参考になったと語っている。）
そしてブロード・ウエイで芝居の演出を手掛けるようになり、作家としてのキャリアをスタートさせ成功、
LAに移り脚本家として本格的に仕事を始めた。
主な脚本を担当した作品に、マイケル・ジャクソンの『THE LEGEND』、ストーリー監修をした作品に、
CBSの大ヒットを記録したテレビシリーズ『WISE GUY』がある。
妻は女優のジル・ゴゴシェスコ。彼女はテレビシリーズの『ツイン・ピークス』で、グレート・ノーザン・ホテルのトゥルーディを演じている。

アンジェロ・バダラメンティ
ANGELO BADALAMENTI
［音楽］

『ツイン・ピークス』の世界を大きく広げる働きをしている天才作曲家。彼はリンチとの共同作業が多く、
『ブルー・ベルベット（'85/BLUE VELVET）』、『ワイルド・アット・ハート（'89/WILD AT HEART）』の音楽も担当している。
『ツイン・ピークス』シリーズの音楽について、バダラメンティは「リンチの描写するムードは、まさに自分の作りたいものであった。」と言う。
そしてマンハッタンのスタジオで二人は即興性を大切にしながら、作曲をして数々の名曲を生みだした。
その他の作品にノーマン・メイラー監督、ライアン・オニール主演の『タフガイは踊らない（'87/TOUGH GUYS DON'T DANCE）』、
チェビー・チェイス主演の人気シリーズ『ナショナル・ランプーンズ・クリスマス・バケーション（'89/LAMPOON'S CHRSTMAS VACATION）』などがある。

CAST

DALE COOPER/KYLE MacLACHLAN	デイル・クーパーFBI特別捜査官/カイル・マクラクラン
PHILLIP JEFFRIES/DAVID BOWIE	フィリップ・ジェフリーズ/デビッド・ボウイ
SAM STANLEY/KIEFER SUTHERLAND	サム・スタンリーFBI捜査官/キーファー・サザーランド
GORDON COLE/DAVID LYNCH	ゴードン・コールFBI地方捜査主任/デビッド・リンチ
CHET DESMOND/CHRIS ISAAK	チェスター・デズモンドFBI特別捜査官/クリス・アイザック
CARL RODD/HARRY DEAN STANTON	カール・ロッド(トレーラー管理人)/ハリー・ディーン・スタントン
LAURA PALMER/SHERYL LEE	ローラ・パーマー（被害者）/シェリル・リー
LELAND PALMER/RAY WISE	リーランド・パーマー（ローラの父）/レイ・ワイズ
DONNA HAYWARD/MOIRA KELLY	ドナ・ヘイワード（ローラの親友）/モイラ・ケリー
JAMES HURLEY/JAMES MARSHALL	ジェームズ・ハーリー（ローラの恋人）/ジェームズ・マーシャル
BOBBY BRIGGS/DANA ASHBROOK	ボビー・ブリッグス（不良少年）/デーナ・アッシュブルック
TERESA BANKS/PAMERA GIDLEY	テレサ・バンクス（最初の被害者）/パメラ・ギドリー
RONETTE PULASKI/PHOEBE AUGUSTINE	ロネット・ポラスキー(ローラの友人)/フィービー・オーガスティン
LEO JOHNSON/ERIC DA RE	レオ・ジョンソン（麻薬密売人）/エリック・ダ・レー

STAFF

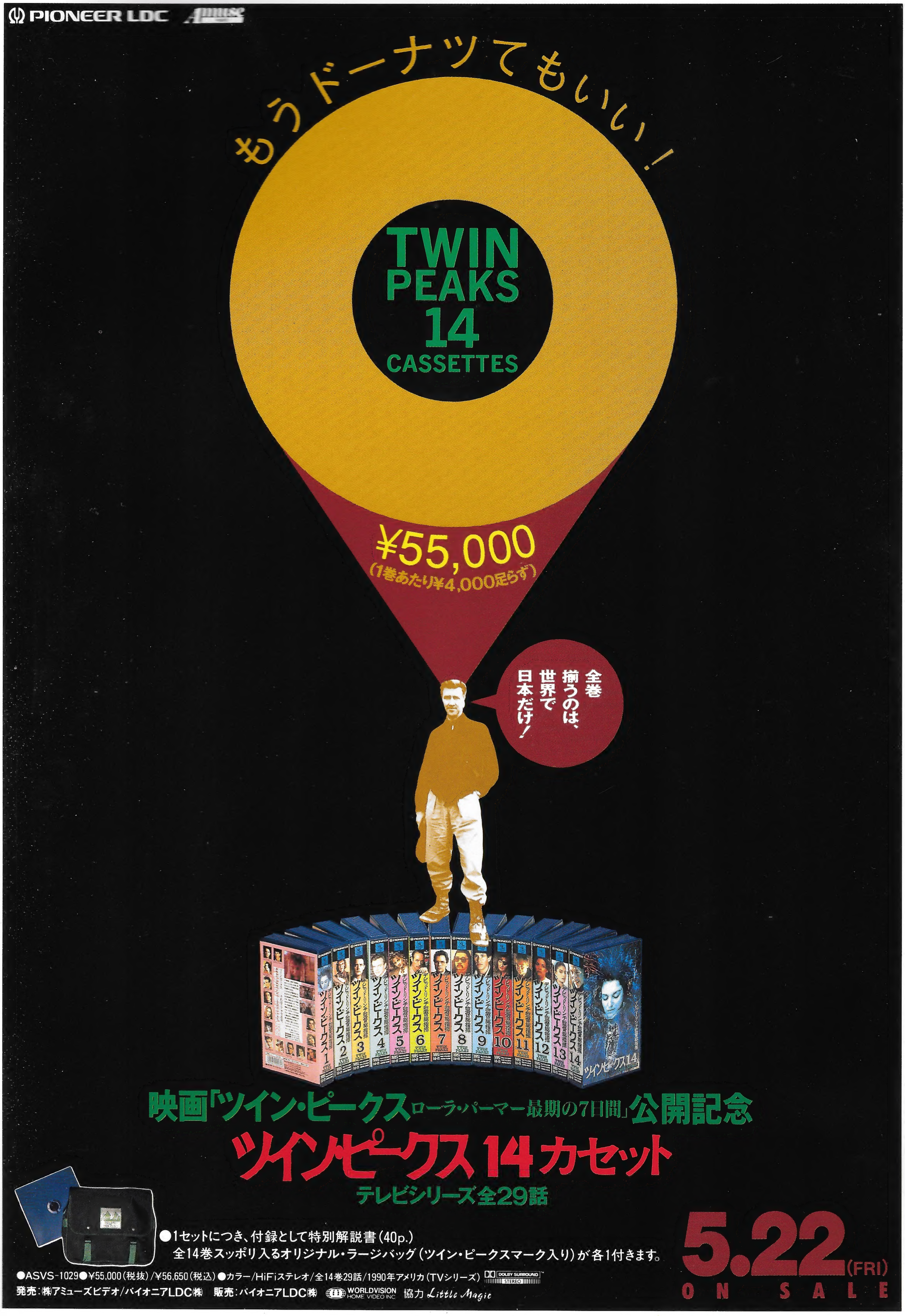
DIRECTOR & WRITER/DAVID LYNCH	監督・脚本/デビッド・リンチ
WRITER/ROBERT ENGELS	脚本/ロバート・エンゲルス
EXECUTIVE PRODUCERS/DAVID LYNCH & MARK FROST	製作総指揮/デビッド・リンチ&マーク・フロスト
PRODUCER/GREGG FIENBERG	製作/グレッグ・フィンバーグ
MUSIC BY/ANGELO BADALAMENTI	音楽/アンジェロ・バダラメンティ
PERFORMED BY/JULEE CRUISE	挿入歌/ジュリー・クルーズ
DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY/RON GARCIA	撮影/ロン・ガルシア
PRODUCTION & COSTUMES DESIGNEND BY/PATRICIA NORRIS	美術・衣装/パトリシア・ノリス

1992年/アメリカ映画●リンチ=フロスト・プロダクション&シビー・ピクチャーズ製作
提供：日本ヘラルド映画、アミューズ、パイオニアLDC●配給：日本ヘラルド映画

● 発行：日本ヘラルド映画株式会社　東京都港区新橋2-10-15 Tel03(3573)1166
● 編集：クリエイティブ・エース ● デザイン：吉田季代
● 編集協力：山川千佳子 ● イラスト：楠部 文
● 製作協力/写真：高橋恭司/後藤繁雄事務所/エスクァイア誌/関 美冬
● 資料提供：扶桑社/東高現代美術館/パイオニアLDC/アミューズ
● 発行日：平成４年５月16日
● 印刷：株式会社久栄社



定価500円(税込み)


PIONEER LDC
もうドーナツでもいい!
TWIN PEAKS 14 CASSETTES
¥55,000
(1巻あたり¥4,000足らず)
全巻揃うのは、世界で日本だけ!
映画「ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間」公開記念
ツイン・ピークス 14カセット
テレビシリーズ全29話
●1セットにつき、付録として特別解説書(40p.)
全14巻スッポリ入るオリジナル・ラージバッグ(ツイン・ピークスマーク入り)が各1付きます。
●ASVS-1029●¥55,000(税抜)/¥56,650(税込)●カラー/HiFiステレオ/全14巻29話/1990年アメリカ(TVシリーズ) DOLBY SURROUND STEREO
発売:㈱アミューズビデオ/パイオニアLDC㈱ 販売:パイオニアLDC㈱ WORLDVISION HOME VIDEO INC 協力 Little Magic
5.22(FRI) ON SALE


WELCOME
TO
TWIN PEAKS
Population 51,200